

録音メモ

音響エンジニア：木村 哲

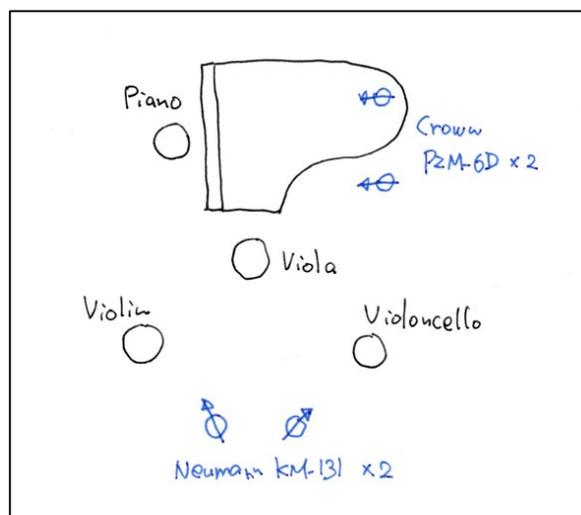
<コンサート概要>

日時： 2018年10月17日、19:00～
 アーティスト： アンサンブル・ラロ
 Diana Ketler pf, Alexander Sitkovetsky vn,
 Razvan Popovici vla, Bernhrd Naoki Hedenborg vc
 場所： サールナート・ホール、宝泰寺、静岡市

<録音メモ>

お客様を入れるコンサートですので、録音のために図々しく目立つところにマイクロフォンを立てることはできません。お客様の視線を遮らないように、マイクロフォンは、ステージ前の低い位置に Neumann KM-131(無指向)×2 と、ピアノの下の床に Crown PZM-6D(バウンダリ、半球指向)×2 としました。(残念ながら写真はありません)

室内楽の場合、ステージ前にステレオマイクを2本立てておけば弦楽器の音はそこそこバランス良く拾えますが、ピアノは奥に位置するためどうしても音が遠くなり、かつ音像が小さくなります。一般的にはピアノの右斜め上方からピアノの弦に向けてマイクロフォンを立てて音を補いますが、以下の理由からバウンダリマイクを選びました。



使用したサールナート・ホールは、静岡駅前の宝泰寺が所有する200名規模のホールで主に映画上映に使われています。映画上映の際にステージ床面からの反射を避けるために、なんとステージ床面に分厚いカーペットを貼り付けてありこれではずすことはできませんでした。

ピアノの音を斜め上からマイクロフォンでとらえる場合、床からの低音反射がミックスされることで音響バランスを得ているという側面がありますが、その床からの反射が得られないためにピアノの音が軽くなる上に楽器のサイズ感が出せないように感じました。ピアノの真下は打鍵音の鋭さは得られませんが豊かな中低音とピアノの大きさを捉えることができます。それがバウンダリマイクを採用した理由です。

このコンサートは、静岡大学のアートマネジメント・ワークショップの一環で、アートに関わる社会人と学生のためにコンサートの裏方・表方の実地研修も同時に行われていました。私はその講師をつとめる

かたわら録音もするという事になっていたので録音だけに専念できません。裏方スタッフの指導で目が離せないため、本来リハーサル中にやるはずのマイク・テストすらできませんでした。そのため、「こんなもんだらう」と見当をつけてマイクロフォンを配置し、あとは録れた音の範囲で編集するしかないで割り切るしかありませんでした。

失敗が許されない現場ではやるが多すぎると必ずミスや見落としをします。トラブルを回避するために録音機材は最小限にしてルーティングや調整を必要とするマイクアンプや RME UCX は使用せず、レコーダー ZOOM F-8 と内蔵マイクアンプだけに割り切りました。いわゆるハイレゾ録音にしないで 44.1kHz/24bit に設定したのも、安全確実に期してのことです。特別な機材を奢ってもシンプルかつ最小限の機材で済ませても、あまり関係ないなあ、録る側の自己満足なのかなあとと思っています。

当初、コンサートの集客は難しいと思われましたが、予想は完全にはずれて超満員となりました。客席のノイズが出やすい上に音がお客様に吸われますから録音条件としては良くありません。案の定、無指向性マイクロフォンを使用したのにホールの残響はあまり拾ってくれませんでした。結局、デッドな音源をどうまとめるかが課題となりました。

演奏内容は完成度が高く素晴らしいものでした。編集の目で探しても気になる箇所は見つかりません。プログラムや飴の包装紙のカシャカシャ音など変なノイズを出すお客様もいなかったのは良かったのですが、それでも足音や何かがかすれる音などさまざまなノイズが記録されました。編集ではそれらを除去したり目立たなくするのに結構手間取りました。

各パートのバランスを取るのにはかなり苦労しました。曲目によって楽器構成や奏者の位置がめまぐるしく変わるのに、マイクロフォンの位置は固定したままだったからです。特定の楽器の音だけ遠く小さかったり、逆に大きすぎることがありましたが、スコアを見て各楽器の音を追いながらコンマ何秒単位の調整でなんとか誤魔化しました(笑)。

幸いなことにバウンダリマイクがピアノのスケール感を良く捉えてくれています。いろいろやってみた結果、ステージ上に4人をポンポンと配置するオーソドックスな音場ではなく、ピアノに包まれるような音の背景の中にヴァイオリンとヴィオラとチェロが存在するように仕上げる方向でミックスしています。いわゆるホール感はありませんが奏者の存在が間近に感じられますので、サロンコンサートの最前列にいるような印象を受けるかもしれません。

バウンダリはもっぱらピアノだけを拾っており、弦のかぶりはほとんどありませんでした。そこで、ミックスでは KM131 が拾った音をベースにして、ピアノの音を加える度合いで全体の楽器バランスをとっています。KM131 は無指向性なのにステレオ感が半端ないので、ミックスでは左右ともに PAN を 85%~90% で左右を寄せています。

Vol.1 一曲目は KM131 だけです。二曲目のチェロとピアノでは、ピアノは左右一杯に広げて右端にいたチェロは少し中央に寄せました。チェロは音が大きいので抑え気味です。三~五曲目のヴィオラやヴァイオリンでは、左に寄りすぎていたので少し中央に寄せています。ヴァイオリンは音が小さかったの

でレベルを上げています。

仕上りの全体的な左右の音量バランスは揃うようにしました。

Vol.1 最後のシルベストロフはピアノシモで通す曲なのですが、生のバランスだと CD 化したときに聞こえなくなってしまうのでかなりレベルを上げています。またフロアノイズが目立つので 25Hz から下をバッサリ切りましたがノイズはかなり残っています。

Vol.2 はすべてピアノ四重奏となったのでミックスバランスはとりやすかったのですが、中央奥のヴィオラが時々音量が足りないことがあります。たとえばシューマンの四重奏の第三楽章の中盤でのヴィオラ・ソロが物足りなく感じたので、他の楽器も道連れになることを承知の上でヴィオラ・ソロの時だけ KM131 のレベルを 1.5dB 上げています。アンコールの R.シュトラウスでは、チェロのソロの第一音目が大きすぎたので、奏者には言わずにその一音だけ 2dB 落としています。

全体としては、常に 20Hz、-12dB/oct の HPF をかけていますが、性能の良いヘッドホンで聞くとフロアノイズが結構聞こえます。奏者の足音が目立つ場所が数箇所あったので、そこだけ 200Hz、-6dB/oct で下を切っています。

普通のホールでしたら、メインで立てた無指向性マイク2本がそれなりに残響を拾ってくれるのですが、残響はかなりプアでした。仕方がないので仕上げの段階で控えめではありますがリバーブのお世話になっています。

ピアニストの Diana Ketler のピアノのセンスの良さと懐の深さに認識を新たにしました。瞬間でもありました。包容力のあるピアノの上に三人の弦楽器の名手が乗っかっている、そんな音楽をなんとか伝えたいと思ったのです。

彼らの演奏は1音1音に誤魔化しがなく無駄な演奏ノイズがとても少ないです。ですから何の懸念もなく鳴っている音をそのまま聴かせることができますし、奏者が発するすべての音が聴いて心地よいと思います。弓と弦が触れる瞬間の感じ (Schumann や Enescu の冒頭)、ピチカートで指先が弦に当たる感触や1音1音の変化 (R.Strauss の冒頭) などが良い例でしょう。

<録音機材>

マイクロフォン:	Neumann KM-131 (omni) ×2、ステージ前、0.8m 間隔 Crown PZM-6D (boundary) ×2、ピアノ下、0.8m 間隔
レコーダー:	Zoom F-8 (4トラック・デジタル・レコーディング)
サンプリングレート:	44.1kHz
量子化ビット数:	24bit
編集ソフト:	Audacity